



## 『森田繁子と腹八分』

河崎秋子 著

徳間書店 刊

定価 1,980円 (本体 1,800円+税)

直木賞作家の著者が日本農業新聞に連載し、大好評を博した農村コメディだ。縦にも横にも大きな体を華やかなスーツで包み、厚化粧とネイルを施した森田繁子は50代の敏腕農業コンサルタント。ひょうきんなアシスタントの山田くんとともに、赤いBMWで高齢化と過疎の進む農村を縦横無尽に駆け巡る。行く先々で獣害、移住者と地元民との確執、配偶者間の不和、外来生物の侵入、後継者不足といった村の困りごとを次々と解決していく様はまさに異端分子としての面目躍如で爽快だ。深刻な地域問題を扱っているが、コミカルな登場人物たちのすっとほけた言動のおかげで最後まで笑い転げながら読み進めてしまう。

本書を読むと、農村の問題は日本の強い家族主義が覆い隠していて表に出ないことが多いという事実が腑に落ちる。家族愛は美化されやすいが、現実の家庭は多くの問題を抱え

ている。経済の低迷で高齢者の生活や若者の自活は困難になったが、うまくいかない責任は本人と家族に帰属され、自助を強調する国や社会は家族間での解決を煽り、他者に迷惑を掛けるなど圧力をかける。しかし、社会が家族を内閉化すれば、家族間の歪みや問題は悪化するのではない。森田繁子は躊躇をせずにどんな家族の事情にもずんずん立ち入る。著者の、たとえ家族の助けという前提が得られなくても誰もが生きられる地域社会であるべきという強いメッセージが感じられる。

物語終盤に森田繁子が農家を引退したおばあちゃんと交わす会話が心にしみる。堂々たる体格の繁子におばあちゃんは「何を食べてこんな大きくなったの」と尋ねる。繁子は「米や野菜や果物など、農家さんが作ってくれたものです」と答える。するとおばあちゃんは黙って繁子の突っ張った腹に顔をうずめる。そうだ。私たちの体を作っているのは、命脈を保っているのは農家なのだ。

(日本農業新聞 齋藤 <sup>さいとう</sup>花 <sup>はな</sup>)